

チノちゃんの叶わぬ恋

神チノ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ごちうさ本編見てね

チノちゃんのココアさんへの伝わらない思い

# 目次

初恋の相手への思い	1
ココアさんとデート!?	前半
ココアさんとデート!?	(後編)
	7

## 初恋の相手への思い

「いらっしやいませ」

「これはとある少女の恋の話

「ご注文は？」

「えーと、カプチーノで」

「はい、かしこまりました」

「はあ、早くココアさんと二人きりになりたい

「お待たせしました。ご注文のカプチーノです」

「チノちゃーりーん」

「仕事中は静かにしてください。で、何の用ですか？」

「オーダーお願いします。コロンビア2つとカプチーノ1つ」

「ココアさん、静かにしてください」

「ココアさんを怒って嫌われないだろうか。

「そうだぞ、ココア。チノの言うとおりだ」

「えへ、怒られちゃった。てへへ」

「ココアさん、早くも持つて行ってください」

くその夜く

「チノちゃーりーん」

「何ですか、ココアさん」

「いい加減お姉ちゃんって呼んでよー」

「なぜですか？」

「もう姉妹何だから、良いじゃん」

「説明になってません。それに姉妹じゃありません」

「急に何を言ってるの？それ以上のなりたいのに……あ、あれ？私何

「考えてるの？ああー」。

「細かいことは気にしない、気にしない。あ、チノちゃん、お風呂沸い

「たよ」

「ココアさん、先にどうぞ」

「一緒に入るよ。ほら、行くよ」

ふああー。今日も入れる嬉しい。

「チノちゃん背中流してあげる」

「やったー」

「別に良いです」

「良いから、良いからあっち向いて」

「ひゃう」

「ごめん。ごめん」

ココアさんの前で変な声だしちゃた。嫌われてないかな？

「それじゃあ、お礼にココアさんの背中も流します」

「うふ、ありがとう」

ココアさんの背中、う、うれしいな

く寝る前く

ココアさんに抱かれ寝たいな。

「チノちゃん一緒に寝よう」

「断っても布団に入ってきてますよね？」

「えへへ。ばれちゃった」

「ふふ、しょうがないココアさんです」

「やったー」

「チノちゃん。明日は学校もラビットハウスも休みだし、夜更かしし

ちやおうよ」

「夜更かしですか？わかりました今回だけですよ」

「やったーこれで少しでも長くココアさんと話せる」

「チノちゃん。まず何する？」

「パズルでもやりませんか？」

「良いね！それにしよう」

ココアさんいかに真剣。ふふ、真剣な顔も可愛いなあ。

「チノちゃん。私の顔に何かついてる？」

「別に見てなんかいません」

あ、危ない。変に思われてしまうところだった。

あのピース取りたいなあ。でも遠いし。ココアさんにとってもら

おう

「ココアさんそのピースとってください」

「どれ？」

「ココアさんの左の方です。もう自分で、とります」

「あ、」

「ご、ごめんなさい。上に乗っかってしまつて」

「ううん、大丈夫だよ。チノちゃんは軽いし」

よかつた嫌われてないみたい。ふああ、眠いなあ。でもココアさんともつと一緒にお話したいなあ

「ん？チノちゃん眠い？私も眠くなつてきちやつた。寝ようチノちゃん」

「おやすみなさい。ココアさん」

「おやすみくチノちゃん」

## ココアさんとデート!?! 前半

今日は1日中ココアさんとお話ができる。

「むにや、うにや、えへへ、チノちゃん…」

ココアさんに抱かれてる、もつとこのままでもいい。もうひと眠り…いや寝れない。

「ふああ、チノちゃん?」

「なんですか、ココアさん」

「起きてたの?」

え、いや少し前から起きてたけどそんなの言えない

「少し前だよ。」

「起きましよう、ココアさん」

「うん」

「朝ご飯作るので座っててください」

よし、今日も頑張らないと、ココアさんにおいしいって言ってもらえるように

「いいよ、手伝うよ」

「大丈夫です、一人でできますから」

私一人で作らないと意味がないので座っていてほしいです

「今日は失敗しないから」

「それを言って毎回失敗してるじゃないですか。それに今日はいつもよりおいしく作れますから」

「ほんとに!?!楽しみにしてるね!」

やったーココアさんに喜んでもらえた!よし頑張りますか。

「できましたよ、ココアさん。運んでください」

「はーい。あ、おいしそうだね!」

「ありがとうございます」

「チノちゃん、今日は何がしたい?」

「なんでも良いんですか?」

「うん。いつものお礼だよ」

なんでも良いって?そんなこと急に言われてもないよ

「別にお礼を言われるようなことしてません」

「んー、細かいことは気にしない。なんでも良いよ、何かない？」

「じゃあ、買い物に行きたいです」

「わかった。用意ができたら行こうね」

「はい、ココアさんも用意ができたら行ってください」

ココアさんと二人きり!?で、で、デート?いやいや、何考えてるの。  
ああー早く用意してココアさんのところ行かないと。

「ココアさん用意できましたか?」

「できたよー、今行くよ」

ふあゝココアさん今日も可愛いなあゝ

「チノちゃん!何が買いたいの?」

「洋服です」

「じゃあ、ショッピングモールに行こう!あそこなら品ぞろえも良いし」

「るんる、るゝ、なんだか二人きりだなんてデートみたいでね!」

「!?そ、そんなことないと思います」

デートってデート?えーココアさん?それはとてもうれしいです

ショッピングモールにて

「チノちゃん服選んであげる」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあさ、チノちゃんは私の選んでね!」

え?・ココアさんのを選ぶ頑張らないと!

「がんばります!」

「あ、これおいしそう!」

「食べていきますか?」

「うん」

ゝ店内ゝ

「チノちゃん別々で頼もう!」



「はい。良いですよ」

「やったー」

く商品届いてく

「チノちゃん。あーん。ほらお口開けて」

?! 間接キスですか？

「ほら、ほら。恥ずかしがらないで」

「あーむ」

間接キスうれしいです

「チノちゃん。頂戴」

「はい。あーむ」

食べてるところも可愛いなあ

## ココアさんとデート!?(後編)

〜店を出て〜

「おいしかったねえ〜」

「はい。とつてもおいしかったです」

今日は嬉しそうに食べてるココアさんを見てうれしいです。

「チノちゃん」

「はい。何ですか?」

「何をしにきたっけ?」

「ココアさんはもう忘れたのですか?しょうがないですね…」

「あ、思い出した!チノちゃんの洋服を買いに来たんだった」

本当にココアさんはしょうがない。私がないと……つて何考え  
てるの私……あー

「チノちゃん。チーノちゃん?」

「な、何ですか?」

「チノちゃんが読んでも返事しないから。何かあったの?」

「特にないです」

「ふくん。じゃあ行こう!」

「ココアさん待ってください」

「チノちゃん早く早く!」

「ま、待ってください」

〜店にて〜

「チノちゃん30分後ここで見せ合いね」

「は、はい」

「よーい…スタート」

ココアさんのを選ぶとは言ったものの、どんなのが似合うかな?も  
し選んで似合わなかったらどうしよう……あー選んでいる間にどん  
どん時間がたってしまう……んーココアさんに似合いそうな服は……  
あ、これなんていいかも。あ、でもよく見たらココアさんには似合わ  
なそうだなあ。他にはどんなのが……

「チノちゃんどう?見つかった?」

「こ、ココアさん！もう時間ですか？」

「ううん。まだだよ。」

「良かったです。安心しました。私はまだ良いのが見つかりませんがココアさんはどうですか？」

「私の方もまだまだ。よーしががんばるよ」

ココアさんも頑張ってくれてる…私はココアさんのことを近くで見してきた…私ならココアさんに似合う服くらいわかる！

～30分後～

「ココアさん時間です。決まりました？」

「うんちゃんと決まったよ！チノちゃんに似合うって自信あるよ！」

「私だってありますよ」

「じゃあ、せーのだよ」

「せーの」

「わあチノちゃんが選んだ服可愛い。ありがとう！」

やった。ココアさんに喜んで。大好きなココアさんのことは私  
がわかってる！だ、大好きって…嫌いってことじゃないけど…好き  
でもなくなくなって…ないし…

「チノちゃん？さっきからぼーっとしてどうしたの？具合でも悪いの  
？」

「別にどこも悪くないです。ただ考え事してただけです」

っつ

「な、何してるのですか？」

「んー？普通に熱がないか計ただけだけど？」

「あ…そうですね」

「変なチノちゃん」

うう…ココアさんに変って思われちゃった。話の流れを変えない  
と。

「ココアさんが選んだ服をよく見せてください」

「あ、そうだった。この服はとーとーとーでも自身があるよ。ど  
う？」

「いいと思います」

「あ、そうだ！これ着てみない？」

「え？何言ってるんですか？」

「いいじゃんいいじゃん！どうせ買うんだから」

「いいですけど…それじゃあ先に買いましょ。それからなら」

え？あの可愛いココアさんがあの服を着たらもつと可愛くなる

…：は！何を考えて私

〜会計を済ませて〜

「せーのだよー！」

「せーの」

「こ……」

「ふああ〜チノちゃん可愛いー写真撮ろう！」

「はい……」

「ココアさんに可愛いと伝えられない……」

「写真撮るよ！はいチーズ！ねえねえチノちゃんチノちゃん私どう？可愛い？」

「はい。可愛いと思いますよ」

「ふふふ。ありがとう」

「後で写真送ってください」

「ok！わかったよ。次どこか行きたい所ある？」

「じゃあ少し遊んでいきませんか？」

「どこがいいかな？あ、ゲーセンなんてどう？」

「いいと思いますよ」

そういえばゲーセンって初めて行くかもしれない。ココアさんは行ったことあるのかな？

「ココアさんはゲーセン行ったことありますか？」

「あるよ！チノちゃんはないの？」

「はい。実は初めてで」

「そっかじゃあ色々教えてあげる！」

〜ゲーセンにて〜

「あ、これやってみよう！」

「なんですかこれ？」

「クレーンゲームって言ってね。中の商品をあのアームでとるゲームだよー。」

「やってみる?」

「はい。やってみたいです」

ウイーリーーン。スカッ

「あはは。取れなかったか。じゃあ教えるからやってみて。手を置いて」

は、ココアさんが私の手の上にはあわど、どうしようらしい

ウイーリーーン。ウイ。ウイーリーーン。ドンッ

「おー。取れました。ありがとうございます」

「今日はこの辺で帰りましょうー!」

「うん」

く帰宅中く

「今日は楽しかったね!」

「はい。今日はありがとうございました」

「こつちこそありがとね。また行きたいね!」

「いつ行きますか?」

「え?いいの?」

「楽しみだなあ〜!」

また、ココアさんとデートにこれる…また私変なこと考えている!

うう……

「チノちゃん?」

「何ですか?」

「顔が赤いよ。大丈夫?おでこ貸して」

「っ!なななにするんですか?」

「え?熱がないか確認しただけだよ。嫌だった?」

「別に嫌ってわけじゃ……」

「チノちゃん早く家に帰ろう!おなか空いちやった」

「いつでもココアさんはココアさんですね!」

そこも可愛い一面なのですが。

帰宅してご飯を食べ布団に入りある少女は嬉しく今日のことを

思い出してゐるのであった。